

愛媛県環境負荷低減事業活動の促進等に関する指針

令和5年3月

愛 媛 県

目 次

I	環境負荷低減事業活動の促進に関する基本的な考え方	1
1	指針策定の趣旨	1
2	環境負荷低減事業活動	1
3	指針策定の考え方と実施計画の策定	3
II	環境負荷低減事業活動（第1号活動）の内容	4
1	水稲	4
(1)	南予及び中山間地域	4
(2)	中・東予の瀬戸内平坦地域	5
2	麦	6
3	大豆	7
4	雑穀	8
5	果樹（柑橘）	9
(1)	温州ミカン	9
(2)	伊予柑	10
(3)	清見	11
(4)	甘夏柑	12
(5)	ポンカン	13
(6)	はっさく	14
(7)	ネーブルオレンジ	15
(8)	日向夏	16
(9)	不知火	17
(10)	その他の柑橘	18
6	果樹（落葉果樹）	19
(1)	キウイフルーツ	19
(2)	ナシ	20
(3)	ブドウ	21
(4)	カキ	22
(5)	モモ	23
(6)	クリ	24
(7)	ウメ	25
(8)	イチジク	26
(9)	ビワ	27
(10)	リンゴ	28
(11)	スモモ	29
(12)	アケビ	30
7	野菜	31
(1)	きゅうり	31
(2)	トマト、ミニトマト	32
(3)	なす	33
(4)	いちご	34
(5)	メロン	35
(6)	ピーマン	36
(7)	かぼちゃ	37
(8)	すいか	38
(9)	未成熟とうもろこし	39
(10)	ほうれんそう	40
(11)	はくさい	41
(12)	キャベツ	42
(13)	レタス	43
(14)	アスパラガス	44

(15)ブロッコリー	4 5
(16)カリフラワー	4 6
(17)しゅんぎく	4 7
(18)ねぎ	4 8
(19)しそ	4 9
(20)非結球つげな	5 0
(21)サンチュ	5 1
(22)さといも	5 2
(23)やまのいも	5 3
(24)自然薯	5 4
(25)ばれいしょ	5 5
(26)かんしょ	5 6
(27)ごぼう	5 7
(28)にんじん	5 8
(29)だいこん	5 9
(30)かぶ	6 0
(31)たまねぎ	6 1
(32)そらまめ	6 2
(33)えだまめ	6 3
(34)いんげんまめ	6 4
(35)えんどう	6 5
(36)菜の花	6 6
8 花き	6 7
(1)バラ	6 7
(2)ユリ類	6 8
(3)チューリップ	6 9
(4)キク	7 0
(5)ストック	7 1
(6)カーネーション	7 2
(7)トルコギキョウ	7 3
(8)スターチス	7 4
(9)シュッコンカスミソウ	7 5
(10)デルフィニウム	7 6
(11)ヒマワリ	7 7
(12)マーガレット	7 8
(13)スイートピー	7 9
(14)アイリス	8 0
(15)フリーズア	8 1
(16)アスター	8 2
(17)ワカマツ	8 3
9 たばこ	8 4
10 茶	8 5
11 飼料作物 (トウモロコシ・ソルゴー・イタリアンライグラス)	8 6
III 環境負荷低減事業活動 (第 2 号活動) の内容	8 7
IV 環境負荷低減事業活動 (第 3 号活動) の内容	8 8
V 環境負荷低減事業活動の促進を図るための措置に関する事項	8 9
VI その他の事項	9 0

I 環境負荷低減事業活動に関する基本的な考え方

1 指針策定の趣旨

環境に配慮した地域社会の創造は、全ての産業が貢献すべき重要な課題であり、自然の物質循環を通して豊かな農作物を生産する農業においても、自らが環境に及ぼす影響を低減し、農業生産活動全体を環境と調和のとれた持続的なものに転換していくことが求められている。

国は、「環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律」（令和4年法律第37号。以下「みどりの食料システム法」という。）、「有機農業の推進に関する法律（平成18年法律第112号）」「環境保全型農業直接支払交付金」等の施策等を推進し、環境と調和した農業の展開を図ることとしている。

このため、県では、法律等の推進により、環境保全型農業を実践する農業者の確保・育成に努め、環境と調和のとれた農業生産の確保を図り、もって農業の健全な発展に資することとしている。

本指針は、みどりの食料システム法に基づき、農業分野における環境負荷低減事業活動の内容、その他必要な事項を定めたものであり、本指針に基づき、環境負荷低減事業活動実施計画を策定する農業者の確保・育成に努めるものである。

2 環境負荷低減事業活動の定義（法第2条第4項）

みどりの食料システム法でいう「環境負荷低減事業活動」とは、農業者が当該農業者の行う農業の持続性の確保に資するよう、農林漁業に由来する環境への負荷（以下、「環境負荷」）の低減を図るために行う事業活動をいう（第4項第1号～第3号）。

- (1) 堆肥その他の有機質資材の施用により土壌の性質を改善させ、かつ化学的に合成された肥料及び農薬の施用及び使用を減少させる技術を用いて行われる生産方式による事業活動（同項第1号活動）

土づくり（堆肥等施用技術）、化学肥料の施用を減少させる技術（化学肥料低減技術）、化学農薬の使用を減少させる低減（化学農薬低減技術）を一体的に行う事業活動で、エコえひめや有機農業等の取組もこの事業活動に該当する。

この事業活動の実施計画について、知事から認定を受けた農業者を「エコファーマー（愛称）」とする。

- 1) たい肥その他の有機質資材の施用に関する技術であって、土壌の性質を改善する効果が高い技術。（堆肥等施用技術）
 - ① 堆肥等有機質資材施用技術（炭素窒素比（C/N比）が概ね10～150の範囲の資材）
 - ② 緑肥作物利用技術
- 2) 肥料の施用に関する技術であって、化学的に合成された肥料の施用を減少させる効果が高い技術。（化学肥料低減技術）
 - ① 局所施肥技術
 - ② 肥効調節型肥料施用技術
 - ③ 有機質肥料施用技術
 - ④ その他技術

3) 有害動植物の防除に関する技術であって、化学的に合成された農薬の使用を減少させる効果が高い技術。（化学農薬低減技術）

- ① 温湯種子消毒技術
- ② 機械除草技術
- ③ 除草用動物利用技術
- ④ 生物農薬利用技術
- ⑤ 対抗植物利用技術
- ⑥ 抵抗性品種栽培・台木利用技術
- ⑦ 天然物質由来農薬利用技術
- ⑧ 土壌還元消毒技術
- ⑨ 熱利用土壌消毒技術
- ⑩ 光利用技術
- ⑪ 被覆栽培技術
- ⑫ フェロモン剤利用技術
- ⑬ マルチ栽培技術
- ⑭ その他技術

(2) 温室効果ガスの排出の量の削減に資する事業活動（同項第2号活動）

燃油使用量の削減を図るための省エネ設備の導入、水田における中干し期間の延長等の取組等のメタンの排出削減等の対策が該当する。

(3) 環境負荷の低減に資するものとして農林水産省告示で定める事業活動（同項第3号活動）

法第2条第4項第3号及び施行規則第1条第1項の規定に基づき農林水産省告示で定める次の第1号類型、第3号類型～第5号類型の事業活動が該当する。

1) 第1号類型

土壌を使用しない栽培技術を用いて行われ、かつ、化学的に合成された肥料及び農薬の施用及び使用を減少させる技術を用いた生産方式による事業活動

2) 第3号類型

土壌への炭素の貯留に資する土壌改良資材を、農地又は採草放牧地に施用して行う生産方式による事業活動

3) 第4号類型

分解性プラスチックを用いた資材の使用その他の取組によるプラスチック使用製品産業廃棄物等（プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律（令和三年法律第六十号）第二条第九項に規定するプラスチック使用製品産業廃棄物等をいう。）の排出若しくは流出の抑制若しくはこれらに伴う農林漁業に由来する環境への負荷の低減又は化石資源由来のプラスチックの使用量の削減に資する生産方式による事業活動

4) 第5号類型

環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律（令和四年法律第三十七号）第二条第四項第一号及び第二号並びに前各号に掲げるもののほか、その地域において通常行われる施肥及び有害動植物の防除と比較して化学的に合成された肥料及び農薬の施用及び使用を減少させる技術並びに生物の多様性の保全その他の環境の保全に資する技術を組み合わせて用いる農業に関する技術を用いて行われる生産方式による事業活動

3 指針策定の考え方と実施計画の策定

県においては、みどりの食料システム法の趣旨に基づき、環境負荷低減事業活動の取組拡大を図るため、「環境負荷低減事業活動の促進等に関する指針」を策定して推進することとする。

第1号活動については、県内の栽培面積や粗生産額の多い農作物及び特に本制度を普及する上で必要と思われる農作物について、「堆肥等施用技術」「化学肥料低減技術」「化学農薬低減技術」の3つの技術について、作物毎に現時点の知見や試験結果から代表的なものを選択して、Ⅱに示した。

策定した作物の種類や生産方式の内容等については、今後の情勢に応じて変更の必要性が生じてくると考えられるとともに、新しい技術の導入にあたっては、個々の営農条件に応じて技術の内容や経済性等の検討が必要である。また、「使用の目安」は、環境と調和のとれた農業生産技術を導入するにあたっての基準を示したものであり、「愛媛県栽培基準（愛媛県環境負荷低減事業活動の促進等に関する栽培基準）」を基準とし、化学肥料窒素分量及び化学農薬使用成分数は、県栽培基準の70%以下とする。なお、慣行とは、地域における標準的な栽培基準とする。

第2号活動及び第3号活動の主な取組内容等をⅢ及びⅣに示した。

おって、各作物共通の留意事項や実施にあたっての支援措置を、Ⅴの「環境負荷低減事業活動の促進を図るための措置に関する事項」に示したので、計画の策定並びに実施にあたっては、これらに留意するとともに、地域農業育成室の技術的な支援を得て策定、実施するものとする。

II 環境負荷低減事業活動（第1号活動）の内容

1 水稻

(1) 南予及び中山間地域

本地域は粘質土壌地帯が多いため、たい肥の施用や稲わら還元を主体とした土づくりを実施するとともに、肥効調節型肥料や局所施肥を組み合わせること等により、収量を維持しながら施肥量の低減を図る。

また、他地域に比べいもち病の常発地帯があり、極早生品種の作付けが多いため斑点米カメムシ類の被害も多いことに留意し、機械除草、除草用動物の利用、再生紙マルチ栽培等による雑草防除を基本に、病虫害発生予察情報の活用や生育初期段階の防除を徹底して、農薬散布回数の低減を図る。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ・ 稲わら、麦わらをすき込む場合は、石灰窒素の施用等により分解の促進を図る。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施して緑肥作物（レンゲ等）を栽培し、田植えの約3週間前までにすき込む。 	たい肥施用量 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 側条施肥等により減肥を行う。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 基肥施用等により減肥を行う。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒技術（ばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、イネンガレシチュウ） ○除草用動物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ アイガモ等を利用して除草剤を削減する。 ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 再生紙マルチ栽培等により除草剤を削減する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 中耕機等により機械的除草を行う。 ○畦畔の機械除草 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○特にコシヒカリ等の耐肥性の低い品種を栽培する場合は、たい肥の施用量に応じて窒素施肥量を減らす。 ○分解促進のための石灰窒素の施用は20kg/10aを目安とする。 ○レンゲの収量が2 t以上の場合は、原則的に窒素肥料は施用しない。 ○さらに化学肥料を削減する場合は、速効性の有機質肥料を組み合わせる。 ○健苗育成と適切な水管理に努める。 	

(2) 中・東予の瀬戸内平坦地域

本地域は壤質土壌地帯が多いため、たい肥の施用を主体とした土づくりを実施するとともに、肥効調節型肥料や局所施肥を組み合わせること等により、収量を維持しながら施肥量の低減を図る。

また、中山間地域と比べるといもち病などの病害虫の発生は比較的少ないが、近年、いもち病に罹病性を示す品種が多くなったことやミナミアオカメムシ等の斑点米カメムシ類の被害が増える傾向に留意し、機械除草、除草用動物の利用、再生紙マルチ栽培等による雑草防除を基本に、病害虫発生予察情報の活用や生育初期段階の防除を徹底して、農薬散布回数の低減を図る。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物(C/N比 20～ 30程度)の完熟たい肥等)の施用を基本とする。 ・稲わら、麦わらをすき込む場合は、石灰窒素の施用等により分解の促進を図る。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施して緑肥作物(レンゲ等)を栽培し、田植えの約3週間前までにすき込む。 	たい肥施用量 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・側条施肥等により減肥を行う。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・全量基肥施用等により減肥を行う。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○温湯種子消毒技術(ばか苗病、いもち病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、イネシガレシチュウ) ○除草用動物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・アイガモ等を利用して除草剤を削減する。 ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・再生紙マルチ栽培等により除草剤を削減する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・中耕機等により機械的除草を行う。 ○畦畔の機械除草 <ul style="list-style-type: none"> ・機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○特にコシヒカリ等の耐肥性の低い品種を栽培する場合は、たい肥の施用量に応じて窒素施肥量を減らす。 ○分解促進のための石灰窒素の施用は20kg/10aを目安とする。 ○レンゲの収量が2t以上の場合は、原則的に窒素肥料は施用しない。 ○化学肥料を削減する場合は、速効性の有機質肥料を組み合わせる。 ○健苗育成と適切な水管理に努める。 	

2 麦

たい肥の施用を主体とした土づくりを実施するとともに、肥効調節型肥料を利用すること等により、収量を維持しながら施肥量の低減を図る。

また、麦は比較的低農薬で栽培できる作物であり、本県での栽培で問題となる病虫害は赤かび病、裸黒穂病、アブラムシ類等であることに留意し、機械除草による雑草防除を基本に、病虫害発生予察情報を活用して農薬散布回数の低減を図る。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・土壌診断に基づいた適正な有機物(C/N比 20～30程度の完熟たい肥等)の施用を基本とする。 ・稲わら、麦わらをすき込む場合は、石灰窒素の施用等により分解を促進する。	たい肥施用量 1 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・肥効調節型肥料を利用して減肥する。 ○有機質肥料施用技術 ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	○温湯種子消毒・太陽熱消毒技術(裸黒穂病) ○機械除草技術 ・播種前耕起(1～2回)、中耕・土入れ、中耕機等による機械的除草を行う。	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○残渣の分解促進のための石灰窒素は20kg/10a施用を目安とする。 ○11月下旬に播種することによって、雑草の発生は抑制される。	

3 大豆

たい肥の施用を主体とした土づくりを実施するとともに、有機質肥料や肥効調節型肥料

料を組み合わせることにより、収量を維持しながら施肥量の低減を図る。

また、中耕・培土等の機械除草による雑草防除を基本に、病害虫の発消長に基づいた適期適剤防除に心がけ、農薬散布回数の低減を図る。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。	たい肥施用量 1 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・ 肥効調節型肥料を利用して減肥する。 ○有機質肥料施用技術 ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	○フェロモン剤利用技術 ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ） ○機械除草技術 ・ 中耕、培土により機械的除草を行う。	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○フェロモン剤を利用する場合、安定した効果を得るためには 5 ha 以上の広面積での処理が必要である。	

4 雑穀

たい肥の施用を主体とした土づくりを実施するとともに、有機質肥料や肥効調節型肥料を組み合わせることにより、収量を維持しながら施肥量の低減を図る。

また、中耕・培土等の機械除草による雑草防除を基本に、病害虫の発生消長に基づいた適期適剤防除に心がけ、農薬散布回数の低減を図る。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。	たい肥施用量 300kg/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・ 肥効調節型肥料を利用して減肥する。 ○有機質肥料施用技術 ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を基準の 70%以下に低減
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ・ 中耕、培土等により機械的除草を行う。	化学農薬使用成分数を基準の 70%以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。	

5 果樹（柑橘）

(1) 温州ミカン

本県の温州ミカンは、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。

このため、有機物の施用を主体とした土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性や化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物を利用することにより除草剤散布の削減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の低減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 2～3 t /10a 豚ふんたい肥 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ゴマダラカミキリ） ・ BT 剤を利用した防除を行う。 （ハマキムシ類、ケムシ類、ジャクトリムシ類） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：黒点病、そうか病、褐色腐敗病等） ・ 網掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：果実吸蛾類） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土で、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 / 2～1 本処理する③成虫の行動範囲が広いため、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するためナメクジ類の多い園では対策に留意する。 	

(2)伊予柑

本県の伊予柑は、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。
ま

た、伊予柑の主産地である松山市及びその周辺は砂壤土の園地が多く、さらに、温州ミカンより施肥量が多い。このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t /10a 豚ふんたい肥 1～2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ゴマダラカミキリ) ・ BT 剤を利用した防除を行う。 (ハマキムシ類、ケムシ類、ジャクトリムシ類) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 / 2 ～ 1 本処理する③成虫の行動範囲が広いと、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

(3) 清見

本県の清見は、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。

このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t /10a 豚ふんたい肥 1～2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ゴマダラカミキリ) ・ BT 剤を利用した防除を行う。 (ハマキムシ類、ケムシ類、ジャクトリムシ類) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 / 2 ～ 1 本処理する③成虫の行動範囲が広いため、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

(4) 甘夏柑

本県の甘夏柑は、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。

このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ゴマダラカミキリ） ・ BT剤を利用した防除を行う。 （ハマキムシ類、ケムシ類、シャクトリムシ類） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1樹当たり1/2～1本処理する③成虫の行動範囲が広いため、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

(5) ポンカン

本県のポンカンは、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。

このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t /10a 豚ふんたい肥 1～2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ゴマダラカミキリ) ・ BT 剤を利用した防除を行う。 (ハマキムシ類、ケムシ類、シヤクトリムシ類) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 / 2 ～ 1 本処理する③成虫の行動範囲が広い場合、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

(6) はっさく

本県のはっさくは、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。

このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ゴマダラカミキリ) ・ BT 剤を利用した防除を行う。 (ハマキムシ類、ケムシ類、シャクトリムシ類) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 / 2 ～ 1 本処理する③成虫の行動範囲が広い場合、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

(7) ネーブルオレンジ

本県のネーブルオレンジは、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t /10a 豚ふんたい肥 1～2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ボーベリア菌を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ゴマダラカミキリ） ・BT 剤を利用した防除を行う。 （ハマキムシ類、ケムシ類、ジャクトリムシ類） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：黒点病、かいよう病、褐色腐敗病等） ・網掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：果実吸蛾類） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 / 2 ～ 1 本処理する③成虫の行動範囲が広い場合、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

(8) 日向夏

本県の日向夏は、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。

このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ゴマダラカミキリ) ・ BT 剤を利用した防除を行う。 (ハマキムシ類、ケムシ類、シクトリムシ類) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 / 2～1 本処理する③成虫の行動範囲が広い場合、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

(9) 不知火

本県の不知火は、水田転換又は傾斜地で栽培されており、総じて樹勢も弱い。

このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発生消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t /10a 豚ふんたい肥 1～2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ゴマダラカミキリ） ・ BT 剤を利用した防除を行う。 （ハマキムシ類、ケムシ類、ジャクトリムシ類） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：黒点病、かいよう病、褐色腐敗病等） ・ 網掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：果実吸蛾類） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 / 2 ～ 1 本処理する③成虫の行動範囲が広い場合、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

(10) その他の柑橘

本県の柑橘類は、ほとんどが傾斜地で栽培されており、土壌も浅く、地力が低い。

このため、適切な有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料を主体とした施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、病害虫等の防除については、機械除草や被覆植物により除草剤散布の節減を図るとともに、天敵微生物資材を広範囲に処理することにより化学農薬の節減を図る。さらに、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t /10a 豚ふんたい肥 1～2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ボーベリア菌を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ゴマダラカミキリ) ・BT剤を利用した防除を行う。 (ハマキムシ類、ケムシ類、ジャクトリムシ類) ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫：黒点病、かいよう病、褐色腐敗病等) ・網掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫：果実吸蛾類) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・被覆植物等により褐色腐敗病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械による除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ゴマダラカミキリ成虫発生初期に処理する②1樹当たり1/2～1本処理する③成虫の行動範囲が広い場合、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため多い園では対策に留意する。 	

6 果樹（落葉果樹）

(1) キウイフルーツ

キウイフルーツは、水田転換又は傾斜地で栽培されている。園地は総じて地力が低い傾向である。

このため、たい肥等の有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料や液肥散布を組み合わせた施肥体系として、土壌の物理性、化学性を改善し、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また化学農薬低減のために、病害虫の発生消長に基づき、適期適剤防除に心がけるとともに、機械による除草を行う。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌表面をわら等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 	

(2) ナシ

ナシは、水田転換又は傾斜地で栽培されている。園地は総じて地力が低い。このため、たい肥等の有機物を施用して土づくりを実施するとともに、有機質肥料や液肥散布を組み合わせ、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、化学農薬低減のために、極力施設化に努めるとともに、フェロモン剤を積極的に利用する。さらに、園地踏査等で発生状況を確認しながら、適期適剤防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ BT 剤を利用した防除を行う。（ハマキムシ類） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象害虫：モモシクイガ[*]、ハマキムシ類、ナシヒメシクイ、モモハモグリガ[*]） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ネット栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象害虫：カメムシ類、果実吸蛾類等） ・ ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害：黒星病、黒斑病、赤星病等） ・ 袋掛栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：黒星病、シクイムシ類、カメムシ類、果実吸蛾類等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌表面をわら等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 ○フェロモン剤を利用する場合、安定した効果を得るためには 5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(3) ブドウ

ブドウは、水田転換又は傾斜地で栽培されている。園地は総じて地力が低いため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善に努めるとともに、有機配合肥料の施用や液肥散布を組み合わせ、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、化学農薬低減のために、施設化に努めるとともに、機械による除草に心がける。さらに園地踏査等で発生状況を確認しながら、適期適剤防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病害虫：ハダニ類） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：チャノカクモンハマキ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害：黒とう病、べと病、晩腐病、枝膨病等） ・袋掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害：黒とう病、べと病、晩腐病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには 5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(4)カキ

カキは、ほとんどが傾斜地で栽培されているため、土壌が浅く肥料養分の流亡が多いことなどから地力が低い。このため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善に努めるとともに、有機配合肥料施用や液肥散布を組み合わせ、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、化学農薬低減のために、病虫害防除では病虫害の発消長を園地踏査等で確認したうえで、適期適剤防除に心がけるとともに、被覆栽培、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：キノコガ、イガ類） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現や助長を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 	

(5)モモ

モモは、水田転換又は傾斜地で栽培されている。園地は総じて地力が低いため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善に努めるとともに、有機配合肥料施用や液肥散布を組み合わせ、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、化学農薬低減のために、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、フェロモン剤の利用、被覆栽培、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ハマキムシ類) ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 (対象害虫：コスカシバ、ハマキムシ類、モモシクイガ、ナシヒメシクイ、モモハモグリガ) ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫：黒星病、カメムシ類等) ・網掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象害虫：カメムシ類、果実吸蛾類等) ・袋掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫：黒星病、炭そ病、灰星病、シクイムシ類、カメムシ類、果実吸蛾類等) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 ○フェロモン剤を利用する場合、安定した効果を得るためには5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(6) クリ

クリは、傾斜地で栽培されているため、土壌が浅く肥料養分の流亡が多いことなどから地力が低い。イタリアンライグラス等による草生栽培を行うとともに、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善や有機配合肥料施用により、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る。

また、化学農薬低減のために、病虫害の発消長を園地踏査等で確認したうえで、適期適剤防除に心がけるとともに、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 	

(7) ウメ

ウメは、水田転換又は傾斜地で栽培されており地力が低いため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善を図るとともに、有機配合肥料施用や液肥散布を組み合わせ、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る必要がある。

また、化学農薬低減のために、病虫害の発消長を園地踏査等で確認したうえで、適期適剤防除に心がけるとともに、フェロモン剤の利用、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象害虫：ヒメスカシバ、ハマキムシ類、ナシヒメシクイ、モシクイガ、モモハモグリガ） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 ○フェロモン剤を利用する場合、安定した効果を得るためには5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(8) イチジク

イチジクは、水田転換で栽培されており地力が低いため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善を図るとともに、有機配合肥料施用や液肥散布を組み合わせ、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る必要がある。

また、化学農薬低減のために、病虫害の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、生物農薬の利用、被覆栽培、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 天敵を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ネゴセンチュウ、ギボシカミキリ幼虫） ・ ボーベリア菌を利用した防除を行う。 （対象害虫：ギボシカミキリ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：疫病等） ・ 網掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象害虫：ガキリムシ類等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌表面をわら類等で被覆し、疫病の発生や雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 ○ボーベリア菌を処理する場合には、①ギボシカミキリ成虫発生初期に処理する②1 樹当たり 1 本処理する③成虫の行動範囲が広いとため、広い面積で連年処理する④ナメクジ類が資材を摂食するため、多い園では対策に留意する。 	

(9) ビワ

ビワは、傾斜地で栽培されており地力が低いため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善を図るとともに、有機配合肥料の施用による樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る必要がある。

また病虫害防除では、病虫害の発生消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、フェロモン剤の利用、被覆栽培、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象害虫：シクイムシ類、カミシ類等） ・ 袋掛け栽培により農薬散布回数を削減する。 （対象害虫：シクイムシ類、カミシ類等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 	

(10) リンゴ

リンゴは、水田転換又は傾斜地で栽培されており地力が低いため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善を図るとともに、有機配合肥料施用や液肥散布を組み合わせ、施肥効率の向上により収量・品質の向上を図る必要がある。

また、化学農薬低減のために、病虫害の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、フェロモン剤の利用、被覆栽培、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハマキムシ類、ヒメシロモントクガ、アメリカシロヒトリ、ケムシ類、ジャクトリムシ類） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象害虫：ハマキムシ類、キンモンホリガ、ナシヒメシクイ、モモンクイガ、モモハモグリガ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ネット栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象害虫：カメムシ類、果実吸蛾類等） ・袋掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象害虫：シクイムシ類、カメムシ類、果実吸蛾類等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現や助長を招くので、化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、安定した効果を得るためには 5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(11) スモモ

スモモは、水田転換又は傾斜地で栽培されている。園地は総じて地力が低いため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壤改善を図るとともに、有機配合肥料施用と液肥散布を組み合わせ、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る必要がある。

また、化学農薬低減のために、病虫害の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、被覆栽培、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壤診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壤診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壤中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハマキムシ類、モモハモグリガ、モモシクイガ、ナシムシクイ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：黒斑病、灰星病等） ・ 袋掛け栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：黒斑病、灰星病、シクイムシ類、カメムシ類、果実吸蛾類等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壤表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○砂壤土では、肥料や石灰質資材の一時期の施用量が多い場合は、分施する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 ○フェロモン剤を利用する場合、安定した効果を得るためには 5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(12)アケビ

アケビは、水田転換又は傾斜地で栽培されており地力が低いため、たい肥等の有機物施用を主体とした土壌改善を図るとともに、有機配合肥料施用や液肥散布を組み合わせ、樹勢の維持・強化と高品質・安定生産を図る必要がある。

また、化学農薬低減のために、病害虫の発消長に基づき適期適剤防除に心がけるとともに、機械による除草に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断を実施し、緑肥作物等の利用による草生栽培を行い、有機物を土壌中に還元する。 	牛ふんたい肥 3～4 t/10a 豚ふんたい肥 1～2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌表面をわら類等で被覆し、雑草を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・管理機や草刈り機等による除草を行う。 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○有機質肥料と液肥を組み合わせた施肥体系とする。 	

7 野菜

(1) きゅうり

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料や有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病虫害防除では被覆資材等を利用し病虫害の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病虫害：アブラムシ類、ハダニ類、コナジラミ類、アザミウマ類） ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ウリハムシ） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（ウイルス病、つる割病） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：シロイロアザミウマ等） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：斑点細菌病、炭疽病等） ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病虫害：オシツコナジラミ、アブラムシ類、ミナミキイロアザミウマ等） ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設）（対象病虫害：灰色かび病、菌核病等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草、アブラムシ類、ミナミキイロアザミウマ等） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーホリ、シルバーテープ、紫外線除去フィルム等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病虫害：灰色かび病、アブラムシ類、ウリハムシ、コナジラミ類等） 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行うことが望ましい。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(2) トマト、ミニトマト

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。
また、病虫害防除では被覆資材等を利用し病虫害の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、土壌病害の発生圃場では抵抗性台木を積極的に利用するなど、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病虫害：コナジラミ類、トマトハモグリバエ） ・拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病虫害：灰色かび病） ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトウ、オオタバコガ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトウ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病虫害：葉かび病、青枯病、褐色根腐病、萎凋病、根腐萎凋病、半萎凋病、わづせちか、ウレシ病、黄化葉巻病） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：疫病、かじり病等） ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病虫害：コナジラミ類、アブラムシ類、オオタバコガ、ハスモンヨトウ等） ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病虫害：灰色かび病、菌核病等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草、アブラムシ類等） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーボリ、シルバーテープ、紫外線除去フィルム等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病虫害：灰色かび病、アブラムシ類、コナジラミ類等） 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5 ha以上の広面積での処理が必要である。 	

(3) なす

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。
また、病虫害防除では被覆資材等を利用し病虫害の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、土壌病害の発生圃場では抵抗性台木を積極的に利用するなど、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病虫害：ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、トマトハモグリバエ等） ・拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病虫害：灰色かび病） ・BT剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：オタハコガ、ハスモンヨトウ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトウ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病虫害：青枯病、半身萎凋病、ねづけ病） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：褐色腐敗病、綿疫病等） ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病虫害：コナジラミ類、アブラムシ類、オタハコガ、ハスモンヨトウ等） ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病虫害：灰色かび病、菌核病等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草、褐色腐敗病、綿疫病、アブラムシ類、ミナキイロアザミウマ等） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病虫害：アブラムシ類等） 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 ○BT剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5 ha以上の広面積での処理が必要である。 	

(4)いちご

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病害虫防除では被覆資材等を利用し病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病害虫：ハダニ類、アブラムシ類、ミカンキイロアザミウマ、ハスモンヨトウ） ・拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病害虫：灰色かび病、うどんこ病） ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ等） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・育苗時に雨よけ・底面給水栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：炭疽病） ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病害虫：アブラムシ類、ハスモンヨトウ、アザミウマ類等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草等） 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(5)メロン

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病虫害防除では発消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。 （対象病虫害：コジラミ類、アブラムシ類、ミキモアザミマ） ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ウリメカ） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病虫害：うどんこ病、つる割病） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草、アブラムシ類等） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーポリ、シルバーテープ、紫外線カットフィルム等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病虫害：アブラムシ類） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 	

(6) ピーマン

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病害虫防除では被覆資材等を利用し病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・局所施肥体系により肥効率を向上する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病害虫：ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類） ・B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ、オオタバコガ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ、オオタバコガ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病害虫：ウイルス病） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：炭疽病、疫病、斑点細菌病等） ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病害虫：アブラムシ類、タバコガ類、ハスモンヨトウ等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類等） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病害虫：アブラムシ類等） 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには 5 ha 以上の広面積での処理が必要である。 	

(7)かぼちゃ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病虫害防除では発生活長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。 （対象病虫害：リメバ） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：雑草） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病虫害：アブラムシ類） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 	

(8) すいか

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病虫害防除では発生活長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 ・ 局所施肥体系により肥効率を向上する。	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ・ 天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病虫害：ハダニ類、アブラムシ類） ○マルチ栽培技術 ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草、褐色腐敗病、炭疽病等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病虫害：つる割病） ○光利用技術 ・ シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病虫害：アブラムシ類） ○機械除草技術 ・ 機械的な方法で除草を行う。	化学農薬使用成分量を基準の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。	

(9)未成熟とうもろこし

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病害虫の発生活長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。	

(10) ほうれんそう

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病害虫防除では被覆資材等を利用し病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、抵抗性品種を積極的に導入するとともに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・局所施肥体系により肥効率を向上する。 ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ、ヨウモシ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：シロイモシヨトウ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病害虫：べと病） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：立枯病、株腐病等） ・開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。（施設ネット） （対象病害虫：アブラムシ類、シロビノメイガ等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーポリ、シルバーテープ、紫外線カットフィルム等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病害虫：アブラムシ類、アザミウマ類） 	化学農薬使用成分量を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(11)はくさい

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病害虫防除ではフェロモン剤や被覆資材を利用して農薬散布回数の節減を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病害虫：軟腐病） ・ B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コナガ、ヨウムシ、アムシ、ハスモンヨトリ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫等：コナガ、シロイモシ、ヨウ、ハスモンヨトリ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病害虫：根こぶ病、ウイルス病） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ・トンネル栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：コナガ、ヨウムシ、アムシ等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、尻腐病） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病害虫：アブラムシ類） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(12) キャベツ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病害虫防除ではフェロモン剤や被覆資材を利用して農薬散布回数の節減を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥体系により肥効率を向上する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コナガ、ヨトウムシ、アオムシ、ハスモンヨトウ） ・ 拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病害虫：軟腐病） ○フェロモン利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コナガ、シロイモジヨトウ、ハスモンヨトウ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病害虫：萎黄病、根こぶ病） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ・トンネル栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：コナガ、ヨトウムシ、アオムシ等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草等） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病害虫：アゲハ類） 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(13) レタス

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、被覆栽培による病害虫の発生抑制やマルチ栽培による除草剤散布の低減を図るとともに、病害虫防除では発生消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥体系により肥効率を向上する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：オオタバコガ、ハスモンヨトウ、ヨトウムシ） ・ 拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病害虫：軟腐病） ○フェロモン利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ等） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ トンネル被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：軟腐病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、灰色かび病、アブラムシ類等） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病害虫：アブラムシ類） 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには 5 ha 以上の広面積での処理が必要である。 	

(14) アスパラガス

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病虫害防除では発消長を的確に把握し、適期防除に心懸けるとともに、耕種的防除等と組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a (初年目 20 t/10a)
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害：ハスモンヨトウ、ヨトウムシ、シイモジヨトウ) ○フェロモン利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害等：シイモジヨトウ等) ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病虫害等：茎枯病等) ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。(施設) (対象病虫害：アザミウマ類、ハスモンヨトウ等) ○土壌還元消毒技術(施設)(土壌病虫害) ○熱利用消毒技術(施設)(土壌病虫害) ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーポリ、シルバーテープ、紫外線カットフィルム等を利用し、害虫の飛来を抑制する。(対象病虫害：アザミウマ類、アザミウマ類) 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(15) ブロッコリー

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病虫害防除ではフェロモン剤や被覆資材を利用して農薬散布回数の節減を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：コガ、ヨウムシ、アムシ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：コガ、シロイモシ、ヨウ、ハモンヨウ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病虫害：根こぶ病） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベタがけ・トンネル栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：コガ、ヨウムシ、アムシ等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により、雑草の発生を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械的な方法で除草を行う。 ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病虫害：アムシ類） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(16)カリフラワー

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病虫害防除ではフェロモン剤や被覆資材を利用して農薬散布回数の節減を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害：コガ、ヨウムシ、アムシ) ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害：コガ等) ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・べたがけ・トンネル栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病虫害：コガ、ヨウムシ、アムシ等) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により、雑草の発生を抑制する。 ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(17) しゅんぎく

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病虫害防除では被覆資材を利用して害虫の侵入防止を図るとともに、発生消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ BT 剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害：ハスモンヨトウ、シロイモジヨトウ、ヨトウムシ) ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ べたがけ栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病虫害等：トマトハモグリバエ等) ・ 施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。(施設) (対象病虫害：トマトハモグリバエ等) 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。	

(18)ね ぎ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病害虫防除ではフェロモン剤を利用して農薬散布回数の低減を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・局所施肥体系により肥効率を向上する。 ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：シロイモジヨウ、ハスモンヨウ、ヨウムシ） ・拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病害虫：軟腐病） ○フェロモン利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：シロイモジヨウ、ハスモンヨウ等） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：シロイモジヨウ、ネギアザミマ） ・紫外線カットフィルムを被覆して農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：ネギコガ、ネギハメグリハエ） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・黄色灯を利用し、害虫の発生を抑制する。（施設） （対象病害虫：ヨウムシ、ハスモンヨウ、シロイモジヨウ等） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(19) しそ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、施設では天敵、フェロモン剤、被覆資材を利用して農薬散布回数の低減を図るとともに、病害虫の発消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病害虫：ハダニ類） ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。（施設） （対象病害虫：ハスモンヨトウ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 	

(20)非結球つげな

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病害虫の発消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コガ、ヨウムシ、アオムシ、タナギソウバ） ○フェロモン利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コガ、シイモジ、ヨウ、ハモンヨウ等） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬の散布回数を低減する。 （対象病害虫：べと病等） ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類、コガ等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha程度の広面積での処理が必要。 	

(21) サンチュ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病害虫の発消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種の防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ヨトウムシ、アオムシ、タマギンノウワバ） ○フェロモン利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：シロイモジ、ヨトウ、ハスモンヨトウ等） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬の散布回数を低減する。 （対象病害虫：べと病等） ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha程度の広面積での処理が必要。 	

(22) さといも

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培や機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病虫害防除では発消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 ・ 局所施肥体系により肥効率を向上する。	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ・ BT 剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトリ） ○フェロモン剤利用技術 ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトウ等） ○機械除草技術 ・ 機械的な方法で除草を行う。	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには 5 ha 以上の広面積での処理が必要である。	

(23) やまのいも

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病害虫の発消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 (対象病害虫：シロイモシヨウ、ハスモンヨウ等) ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ヤマノイモガ、シロイモシヨウ) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫等：雑草等) ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分量を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(24) 自然薯

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病害虫の発生活長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：シロイモジヨトウ、ハスモンヨトウ等） ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ヤマノイモガ、シロイモジヨトウ） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草等） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(25) ばれいしょ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病虫害防除では発消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・局所施肥体系により肥効率を向上する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・拮抗微生物により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：軟腐病） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ヨトウムシ） ○抵抗性品種栽培（対象病虫害：そうか病） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草等） 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには 5 ha 以上の広面積での処理が必要である。 	

(26)かんしょ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培による雑草防除を基本に、病虫害の発消長に基づいた適期適剤防除に心がけ、農薬散布回数の低減を図る。

区分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ・稲わら、麦わらをすき込む場合は、石灰窒素の施用等により分解の促進を図る。	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・肥効調節型肥料を利用して減肥する。 ○有機質肥料施用技術 ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ・天敵を利用した防除を行う。 （対象病虫害：コガネムシ類） ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトウ） ○フェロモン剤利用技術 ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトウ） ○マルチ栽培技術 ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草）	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○分解促進のための石灰窒素の施用は20kg/10aを目安とする。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5 ha以上の広面積での処理が必要である。	

(27) ごぼう

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病虫害防除では発消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	○マルチ栽培技術 ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草） ○機械除草技術 ・ 機械的な方法で除草を行う。	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。	

(28) にんじん

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病虫害防除では発消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	○マルチ栽培技術 ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草） ○機械除草技術 ・ 機械的な方法で除草を行う。 ○光利用技術 ・ シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病虫害：アブラムシ類）	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。	

(29) だいこん

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病害虫防除ではフェロモン剤や拮抗植物の導入を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。耕種的防除等と組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥体系により肥効率を向上する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病害虫：軟腐病） ・ B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コナガ、ヨトウムシ、アオムシ、ハスモンヨトウ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コナガ、シロイモシ、ヨトウ、ハスモンヨトウ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病害虫：萎黄病） ○対抗植物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 対抗植物を利用して農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：キタネグサレセンチュウ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ベたがけ栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類、コナガ、アオムシ、キスジノミハムシ等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類等） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病害虫：アブラムシ類） 	化学農薬使用成分量を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○局所施肥を実施する場合は追肥体系とする。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 ○対抗植物（ハイオウ）を利用した防除は、夏だいこんを対象に鶏糞施用を組み合わせ、数年間継続して実施する。 	

(30) かぶ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、フェロモン剤を利用して農薬散布回数の低減を図るとともに、病害虫の発生消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コガ、ヨウムシ、アオムシ、ハモンヨトリ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コガ、シロイモシヨトリ、ハモンヨトリ等） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・被覆栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類、コガ、アオムシ等） ○抵抗性品種栽培、台木利用技術（対象病害虫：根こぶ病） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。（対象病害虫：アブラムシ類） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合は、安定した効果を得るため、5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

(31) たまねぎ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、機械除草やマルチ栽培による除草剤散布の低減に努めるとともに、病害虫の発生消長を的確に把握し適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の約 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 局所施肥体系により肥効率を向上する。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 拮抗微生物を利用した防除を行う。 （対象病害虫：軟腐病） ・ BT 剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ヨトウムシ） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草等） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 	

(32) そらまめ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病虫害防除では発消長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・BT剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害：ヨトウムシ) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 (対象病虫害等：雑草等) ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーホリ、シルバーテープ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。(対象病虫害：アブラムシ類) 	化学農薬使用成分数を基準の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 	

(33) えだまめ

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、中耕・培土による除草剤散布の節減を基本として、病虫害防除では発生消長の的確に把握し、適期防除に心懸けるとともに、耕種的防除等と組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・BT 剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトリ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：ハスモンヨトリ） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには 5 ha 以上の広面積での処理が必要である。 	

(34) いんげんまめ（モロッコインゲンを含む）

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、マルチ栽培又は機械除草による除草剤散布の低減に努めるとともに、病害虫の発生活長を的確に把握し、適期防除に心がける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・天敵を利用した防除を行う。（施設） （対象病害虫：ハダニ類） ・BT剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：炭疽病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草） ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・機械的な方法で除草を行う。 ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーポリ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。 （対象病害虫：アブラムシ類） 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○天敵昆虫を利用する場合は、対象害虫の発生状況の観察を行い、適期に放飼する。 	

(35) えんどう

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病虫害防除では被覆資材等を利用し病虫害の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害：ハスモンヨトリ) ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害：シロイモジヨトリ) ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・雨よけ栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病虫害：苗立枯病、根腐病等) ・施設開口部への侵入防止資材被覆により農薬散布回数を低減する。(施設) (対象病虫害：アブラムシ類、ウラナシジミ等) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 (対象病虫害等：雑草) ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーホリ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。 (対象病虫害：ガ類) 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5 ha程度の広面積での処理が必要である。 	

(36) 菜の花

たい肥等の有機物施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機肥料を組み合わせた施肥効率の向上によって生産の安定化を図る。

また、病虫害防除では被覆資材等を利用し病虫害の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期防除に心懸ける。さらに、耕種的防除等と組み合わせ効率的な防除に努める。

区 分	環境負荷低減事業活動の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ B T 剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：アオムシ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：コガ等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草） ○光利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ シルバーポリ等を利用し、害虫の飛来を抑制する。 （対象病虫害：アブラムシ類） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を減肥する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには 5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 	

8 花き

(1) バラ

本県のバラは、田土や真砂土を客土した水田で栽培されている。バラは永年作物であることから一度植え付けると数年間は植え替えをしないため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等の施用により施肥効率を向上させ、採花本数及び品質の維持を図る。

また、本県ではほとんどが施設栽培であり、主要病害虫は黒星病、うどんこ病、べと病、アブラムシ類、ハダニ類等である。このため、被覆栽培による病害の抑制や害虫の侵入防止を図るとともに、病害虫の発生消長を的確に把握し、効率的な防除を行う。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・新植時、改植時には、土壌診断に基づいた適正な有機物(C/N比 20～30程度の完熟たい肥等)の施用を基本とする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培(雨除け施設含む)により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫：べと病、黒星病、うどんこ病等) ・施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫：アブラムシ類、アザミヤカ類等) ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。(施設) (対象病害虫：灰色かび病、べと病、黒星病等) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫等：雑草、アブラムシ等) ○土壌還元消毒技術(施設)(土壌病害虫) ○熱利用消毒技術(施設)(土壌病害虫) 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○土壌溶液のNO₃濃度を400～600ppmに維持する。EC値の適正範囲は1～2mS/cmのため、過剰施肥に注意する。 ○黄色蛍光灯を施設内に設置すると、タバコカビ類、ヨトウムシ類に対する活動抑制効果、忌避効果があり、化学農薬散布回数の削減が可能である。 ○土壌溶液診断と作物の生育観察を基本に、有機配合肥料・緩効性化成肥料と液肥・速効性化成肥料の組み合わせによる施肥体系とすることが望ましい。 	

(2) ユリ類

本県のユリ類は、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：葉枯病、炭そ病、疫病等） ・施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類、アザミウマ類等） ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病害虫：葉枯病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○多肥は濃度障害を起こしやすいため、シンテッポウユリではEC値は0.6～0.7mS/cm、スカシユリでは0.8mS/cm程度とし、過剰施肥に注意する。 ○土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(3) チューリップ

本県のチューリップは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：かいよう病、褐色斑点病、球根腐敗病、葉腐病、茎腐病、灰色かび病等） ・施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ等） ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病害虫：灰色かび病、褐色斑点病、かいよう病等） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○植え付け土壌は生土容積抽出法でEC 0.4mS/cmである。多肥は濃度障害を起こしやすいため、過剰施肥に注意する。 	

(4) キク

本県のキクは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病虫害防除では、被覆資材を利用し、病虫害の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T 剤を利用して防除を行う。 （対象病虫害：オオハコガ、ハスモンヨトウ） ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病虫害：シロイチモジヨトウ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：白さび病、黒さび病、褐さび病、黒斑病、褐斑病、べと病等） ・施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：アブラムシ類、アザミヤカ類等） ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病虫害：白さび病、黒さび病、褐さび病、黒斑病、褐斑病、べと病、灰色かび病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病虫害） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○濃度障害の生じやすい品種の好適域は 0.6mS/cm で、障害発生域は 1.3mS/cm のため過剰施肥に注意する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには 5 ha 程度の広面積での処理が必要である。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(5) ストック

本県のストックは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・B T剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：コガ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：軟腐病、黒腐病、炭疽病、菌核病等） ・施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類、コガ等） ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病害虫：炭疽病、灰色かび病、菌核病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○適正EC値は0.5mS/cmである。EC値が0.5～1.0mS/cmの場合は、3～5割減肥、1.0～1.5mS/cmでは基肥なし、1.5mS/cm以上は除塩対策を行う。 ○B T剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(6) カーネーション

本県のカーネーションは、水田の壤質土壌地帯での土耕栽培か、またはベンチ栽培が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：シロイロシヨウ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類、アザミウマ類、タバコガ類、ヨトウムシ類等） ・防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病害虫：灰色かび病、疫病、斑点病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○EC値はおおむね1.0mS/cm以下が安全で、1.5mS/cm以上では障害が発生するため、過剰施肥に注意する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○黄色蛍光灯を施設内に設置すると、タバコガ類、ヨトウムシ類に対する活動抑制効果、忌避効果があり、化学農薬散布回数の削減が可能である。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5ha程度の広面積での処理が必要である。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(7) トルコギキョウ

本県のトルコギキョウは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 (対象病害虫：シイモジヨウ) ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培(雨除け施設含む)とする。 (対象病害虫：炭疽病等) ・施設開口部への寒冷紗被覆を実施する。 (対象病害虫：アブラムシ類、アザミウマ類、ヨウムシ類等) ・防霧性フィルムの利用(施設) (対象病害虫：灰色かび病、炭疽病等) ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 (対象病害虫等：雑草、アブラムシ類) ○土壌還元消毒技術(施設) (土壌病害虫) ○熱利用消毒技術(施設) (土壌病害虫) 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○適正EC値は0.8～1.0mS/cmのため、過剰施肥をしない。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5ha程度の広面積での処理が必要である。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(8) スターチス

本県のスターチスは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）とする。 （対象病害虫：炭疽病、褐斑病等） ・ 施設開口部への寒冷紗被覆を実施する。 （対象病害虫：アブラムシ類、ヨトウムシ類等） ・ 防霧性フィルムの利用（施設） （対象病害虫：灰色かび病、炭疽病、褐斑病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○生育中期の適正 EC 値は 0.15mS/cm 内外のため、過剰施肥をしない。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(9) シュッコンカスミソウ

本県のシュッコンカスミソウは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フェロモン剤利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 （対象病害虫：シイロミドリウレ） ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）とする。 （対象病害虫：疫病、黒斑病等） ・施設開口部への寒冷紗被覆を実施する。 （対象病害虫：アブラムシ類、ヨトウムシ類等） ・防霧性フィルムの利用（施設） （対象病害虫：灰色かび病、黒斑病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○生育中期の適正EC値は0.15mS/cm内外のため、過剰施肥をしない。 ○BT剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5ha程度の広面積での処理が必要である。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(10)デルフィニウム

本県のデルフィニウムは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）とする。 （対象病害虫：軟腐病、斑点細菌病等） ・施設開口部への寒冷紗被覆を実施する。 （対象病害虫：アブラムシ類、ヨトウムシ類等） ・防霧性フィルムの利用（施設） （対象病害虫：灰色かび病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○用土1L当たりの養分含有量は窒素、リン酸、カリとも100～150mg程度が適当であり、過剰施肥をしない。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(11) ヒマワリ

本県のヒマワリは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）とする。 （対象病害虫：斑点細菌病、べと病、黒斑病等） ・施設開口部への寒冷紗被覆を実施する。 （対象病害虫：アブラムシ類、アザミヤカ類等） ・防霧性フィルムの利用（施設） （対象病害虫：べと病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○窒素分が多いと太茎になって商品価値が無くなるため、基肥を施用せず追肥で対応する。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(12) マーガレット

本県のマーガレットは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図ることが必要である。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）とする。 （対象病害虫：茎枯病等） ・ 施設開口部への寒冷紗被覆を実施する。 （対象病害虫：アブラムシ類、ナメクグリバエ等） ・ 防霧性フィルムの利用（施設） （対象病害虫：菌核病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○窒素分が多いと腋芽が伸長して草姿が悪くなる。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(13) スイートピー

本県のスイートピーは、島嶼部の砂壌質の畑地での栽培が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図ることが必要である。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N比 20～30程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の30日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）とする。 （対象病害虫：炭疽病、褐斑病等） ・施設開口部への寒冷紗被覆を実施する。 （対象病害虫：アブラムシ類、ヨトウムシ類、ナメクジ等） ・防霧性フィルムの利用（施設） （対象病害虫：灰色かび病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○適正EC値は0.4～0.8mS/cmで、NO₃-Nは10～20mg/100gを目安にする。なお、窒素過多は着蕾が遅れたり、落蕾の原因となるので、過剰施肥に注意する。 ○養液土耕栽培を導入する場合は、土壌溶液診断、汁液診断等の簡易栄養診断を実施して施肥管理を行う。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(14) アイリス

本県のアイリスは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：軟腐病、斑点病、黒斑病等） ・ 施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類等） ・ 防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病害虫：黒斑病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○施肥前の EC が 0.2mS/cm 以上の場合は、窒素施用量を減らすようにし、EC が 1 mS/cm 以上の場合は除塩する。 	

(15) フリージア

本県のフリージアは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 ○局所施肥技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 養液土耕栽培を導入する。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：軟腐病、斑点病、黒斑病等） ・ 施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫：アブラムシ類等） ・ 防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病害虫：黒斑病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病害虫等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○施肥前の EC が 0.2mS/cm 以上の場合は、窒素施用量を減らすようにし、EC が 1 mS/cm 以上の場合は除塩する。 	

(16)アスター

本県のアスターは、水田の壤質土壌地帯が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図る。

また病虫害防除では、被覆資材を利用し、病虫害の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○被覆栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ ビニル、硬質フィルム等被覆栽培（雨除け施設含む）により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：斑点病、さび病、べと病等） ・ 施設開口部への寒冷紗被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害：ハモグリバエ類、アブラムシ類、アザミウマ類等） ・ 防霧性フィルムの利用により農薬散布回数を低減する。（施設） （対象病虫害：灰色かび病、べと病等） ○マルチ栽培技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 （対象病虫害等：雑草、アブラムシ類） ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病虫害） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病虫害） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○土壌の EC が 0.8mS/cm を超えると順調な生育をしないため、過剰施肥に注意する。 ○マルチの種類は、アブラムシ類に忌避効果のあるシルバーマルチが効果的である。 	

(17)ワカマツ

本県のワカマツは、粘質な畑地造成土での栽培が多いため、たい肥等有機物の施用を主体とした土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効調節型肥料、有機質肥料等を組み合わせた施肥効率の向上により生産の安定化を図ることが必要である。

また病害虫防除では、被覆資材を利用し、病害虫の発生抑制や侵入防止を図るとともに、発消長を的確に把握し適期適剤防除に心がける。さらに、耕種的防除等を組み合わせ、効率的な防除に努める。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○たい肥等有機質資材施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 土壌診断に基づいた適正な有機物（C/N 比 20～30 程度の完熟たい肥等）の施用を基本とする。 ○緑肥作物利用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 緑肥を利用する場合は、すき込み時期を定植の 30 日前までとする。 	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。 	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草技術 <ul style="list-style-type: none"> ・ 機械的な方法で除草を行う。 ○土壌還元消毒技術（施設）（土壌病害虫） ○熱利用消毒技術（施設）（土壌病害虫） 	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。	

9 たばこ

たばこは、細粒質の褐色森林土あるいは黄色土の緩傾斜地に多く栽培されている。地力の消耗が激しいため、良質な有機質資材の施用を行うことが必要であり、また、有機質肥料の施用により化学肥料の節減に努めるとともに、石灰質資材の施用を行う。

病虫害防除については、土壌病害回避のため、輪作や反転耕などによる耕種的防除に努めるとともに、発生状況に応じた適期適剤防除を行う。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・完熟たい肥を11月から12月に施用する。 また、極力敷き草や敷きワラを行う。	たい肥施用量 2 t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 ・有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を慣行の70%以下に低減
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ・BT剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害:ヨトウムシ、アオムシ、タバコアオムシ) ・天敵を利用した防除を行う。 (対象病虫害:サツマイモネコブセンチュウ) ・拮抗微生物を利用した防除を行う。 (対象病虫害:腰折病、白絹病) ○フェロモン利用技術 ・フェロモン剤を利用した防除を行う。 (対象病虫害:ハスモンヨトウ) ○被覆栽培技術 ・べたがけやトンネル栽培により農薬散布回数を低減する。 (対象病虫害:アブラムシ類等) ○マルチ栽培技術 ・マルチ被覆により農薬散布回数を低減する。 (対象病虫害等:雑草、アブラムシ類) ○機械除草技術 ・機械的な方法で除草を行う。	化学農薬使用成分数を慣行の70%以下に低減
留意事項	○たい肥は塩素濃度0.1%以下のものを使用する。 ○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○有機物施用時に表土とよく混和するとともに、病害防除を兼ねて、夏2回、冬1回の反転耕を行う。 ○BT剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、露地栽培で安定した効果を得るためには5ha以上の広面積での処理が必要である。	

10 茶

茶園土壌の多くは、細粒質の褐色森林土あるいは黄色土に属し、緩傾斜地に位置する。また、有機質資材の施用が少なく、窒素施肥量が多いため、強酸性となりやすい。このため、肥効調節型肥料の施用の節減に努めるとともに、石灰質資材の施用を行う。また、中耕とあわせて、良質な有機質肥料の施用を図る。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・ 土壌診断に基づき、完熟たい肥を秋に施用することを基本とし、極力、敷き草や敷きわらを行う。	2 番茶収穫後に 1～2t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料施用技術 ・ 肥効調節型肥料を用いた施肥体系とする。 ○有機質肥料施用技術 ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を基準の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	○生物農薬利用技術 ・ B T 剤を利用した防除を行う。 (対象病害虫：ヨモギエダシヤク、チャノコカクモンハマキ、チャハマキ、チャノホソガ) ○フェロモン剤利用技術 ・ フェロモン剤を利用した防除を行う。 (対象病害虫：チャノコカクモンハマキ、チャハマキ) ○機械除草技術 ・ 機械的な方法で除草を行う。	化学農薬使用成分数を基準の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿由来のたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。 ○有機物施用時に表土とよく混和する。 ○B T 剤の連用は抵抗性害虫の出現を招くので、環境負荷の低い化学農薬と輪用する。 ○フェロモン剤を利用する場合、安定した効果を得るためには 5 ha 程度の広い面積での処理が必要である。	

1 1 飼料作物（トウモロコシ・ソルゴー・イタリアンライグラス）

本県の飼料作物生産は、良質たい肥の施用の利用により土壌の理化学性の改善を図るとともに、肥効率の向上と収量の維持及び化学肥料の施肥量の低減を図る。

また、機械除草による除草剤散布の低減を基本として、農薬散布回数の低減を図る。

区 分	農業生産方式の内容	使用の目安
たい肥等施用技術	○たい肥等有機質資材施用技術 ・ 土壌診断に基づいた適正な良質たい肥の施用を基本とする。	牛ふんたい肥 5 t/10a 豚ふんたい肥 3 t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料施用技術 ・ 有機質肥料を用いた施肥体系とする。	化学肥料による窒素成分量を慣行の 70% 以下に低減
化学農薬低減技術	○機械除草技術 ・ 機械的な方法で除草を行う。	化学農薬使用成分数を慣行の 70% 以下に低減
留意事項	○家畜糞尿を含むたい肥を施用した場合は、相当分の化学肥料を削減する。	

Ⅲ 環境負荷低減事業活動（第2号活動）の内容

温室効果ガスの排出の量の削減に資する事業活動の主な取組事例等 ※下に示した取組に限らず、現場の実態に即した形で取り組むことが可能

取組例	取組の概要・効果	設備導入の内容（例）	備考 (技術導入時の留意点、詳細情報等)
施設園芸における省エネルギー化の取組	<ul style="list-style-type: none"> 以下の取組等により、燃油使用量を削減 ・ヒートポンプや木質バイオマス暖房機の導入、再生可能エネルギーの利用 ・内張・外張の多層化や、保温性の高い被覆資材の利用による室温の保温性向上 ・温度ムラの改善や変温管理の実施、作物の局所加温技術の導入 ・廃熱や廃 CO₂ の回収・利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒートポンプ ・木質バイオマス暖房機 ・温度センサー ・内張・外張の多層化設備 ・多段式サーモ装置 ・循環扇 	<ul style="list-style-type: none"> ・「施設園芸省エネルギー生産管理マニュアル」（農林水産省生産局長通知）を参照すること。 ・「施設園芸省エネ生産管理チェックシート（農林水産省農産局長通知）に基づき、省エネ暖房の基本的な項目（燃油暖房機器のメンテナンス、外張被覆・内張カーテンの点検等）の実践により、10%程度の燃油削減効果が期待される。
農業機械の省エネルギー化の取組	<ul style="list-style-type: none"> ・自動操舵装置を備えたトラクターの利用による燃料使用量を削減（13.3%） ・バイオディーゼル燃料の利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・自動操舵装置 	<ul style="list-style-type: none"> ・「農業機械の省エネ利用マニュアル 平成27年度版」
水稻栽培における中干し期間の延長・間断灌漑の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・中干し期間を慣行よりも1週間程度延長し、水田土壌内のメタン生成菌の活動を抑制することにより、メタン排出量を削減（約30%） ・さらに、湛水と落水を繰り返す間断灌漑を組み合わせることで、より効果的にメタンの削減が可能 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT水管理システム 	<ul style="list-style-type: none"> ・「水田メタン発生抑制のための新たな水管理技術マニュアル」（農研機構）を参照すること。 ・過度な中干し延長により収量減の可能性があるため、水田の状態や稲の生育状況を踏まえて適切な範囲で実施すること。 ・水生生物や水田生態系への影響を考慮し、その実施時期に留意すること。
茶園土壌における N ₂ O の排出抑制の取組	<ul style="list-style-type: none"> ・茶の栽培において、窒素含有化学肥料又は有機肥料に代えて、硝化抑制剤入りの化学肥料又は石灰窒素を含む複合肥料を施肥することにより、土壌からの一酸化二窒素の排出を抑制。 	<p style="text-align: center;">—</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・詳細はJクレジット制度の方法論を参照すること。

IV 環境負荷低減事業活動（第3号活動）の内容

農林水産大臣が定める主な取組事例等 ※以下に示した取組に限らず、告示で定める範囲内において、現場の実態に即した形で取り組むことが可能

類型	取組例	取組の概要・効果	想定される設備導入の内容(例)	備考 (留意点、詳細情報等)
第1号	土壌を使用しない栽培における化学肥料・化学農薬の使用低減	・環境制御装置の導入や健康な種苗の使用等により、化学肥料・化学農薬の使用を低減。	・環境制御装置	・化学農薬使用成分数を県栽培基準の70%以下、化学肥料窒素成分量を現状より削減するものとする。
第3号	バイオ炭の農地施用	・もみ殻や果樹剪定枝、木竹当を原料とする「バイオ炭」を農地土壌に施用することにより、本来であれば排出される二酸化炭素を、炭素として農地土壌に貯留。	・バイオ炭製造装置	・詳細は、J-クレジット制度の方法論を参照すること。 ・「バイオ炭の施用量上限の目安について」を踏まえ、過剰な施用により作物の生育に悪影響が生じないように留意すること。
第4号	生分解性マルチの利用	・作物収穫後に土壌中にすき込むことで、微生物によって分解され、廃プラスチックの排出を抑制。	—	・「生分解性マルチの活用事例」（農林水産省生産局作成）を参照すること。 ・強風による飛散や河川等への流出に留意し、土壌中にしっかりとすき込むこと。
第4号	プラスチック被覆肥料の代替技術の導入	以下の取組等により、プラスチック被覆肥料の被覆殻の流出を抑制。 ・プラスチックを使用しない緩効性肥料やペースト肥料への切り替え ・浅水代かき、排水口ネットの設置等の流出防止対策の実施	・流し込み施肥機 ・ペースト施肥機 ・レーザーレベラー ・水田ハロー	・「プラスチックと賢く付き合うための農業生産現場での取組」（農林水産省ホームページ）を参考とすること。
第5号	化学肥料・化学農薬の低減の取組と組み合わせた冬期湛水管理の実施	・冬期湛水により、非作付期における水生動物の生息場所を確保し、生物多様性の保全に貢献。 ・土壌診断を踏まえた適正施肥や、総合防除の実践等を通じて化学肥料・化学農薬の使用を低減。	—	・環境保全型農業直接支払交付金における「地域特認取組」を参考とすること。 ・化学肥料窒素成分量及び化学農薬使用成分数は、県栽培基準の70%以下とする。

V 環境負荷低減事業活動の促進を図るための措置に関する事項

- (1) 土づくりや適正な施肥を行うためには、土壌有機物含有量や可給態窒素含有量等を分析項目に含めた土壌診断が不可欠である。

このため、県下の地方局農林水産振興部地域農業育成室においては、農業者から依頼がある場合に、土壌診断を実施し、土壌の性質に関する情報を提供する体制を整備している。

また、主要な農業協同組合の営農センターや一部の市町においても土壌診断機器が整備されており、本県における環境負荷低減事業活動（1号活動）の実施にあたっては、これらの土壌診断機能を活用し、普及指導員や営農指導員等のアドバイスを受けて土壌管理を行うことが適切である。

なお、地方局農林水産振興部地域農業育成室においては、植物体の栄養診断を実施できる体制を整備しているため、必要に応じて、これらの機器を活用したアドバイスを受けるものとする。

- (2) 病虫害防除については、病虫害防除所が発生予察情報を月1回、必要に応じて、警報、注意報、特殊報等を発表しており、これに基づいて適期適剤防除に努めるとともに、耕種防除等を組み合わせ、効率的な防除に努めるものとする。

- (3) 環境負荷低減事業活動（1号活動）の実施にあたっては、区分毎に示した使用の目安を目標に実施するものとし、慣行については、化学肥料は、当該農作物の生産における化学肥料の使用量が、当該地域の同作期において慣行的に行われている使用量（化学肥料の窒素成分量）を基に、また、化学農薬は、当該農作物の生産における化学農薬の使用成分数が、当該地域の同作期において慣行的に行われている使用成分数（土壌消毒剤、除草剤等を含めた使用成分数の合計）を基に個々の削減目標を定めて実施するものとする。

なお、県内の標準的な使用量等については、毎年「愛媛県施肥基準」や「愛媛県病虫害防除指針」を発行して、主要な作物や品種毎に指針を示してあるので参考にする。

また、たい肥や肥効調節型肥料の種類によって、分量や肥効発現速度が異なる等の特徴があるため、利用する資材の選択、使用方法については、普及指導員や営農指導員等のアドバイスを受けて行うことが適切である。

VI その他の事項

地力増進法に基づく地力増進地域に指定された地域にあつては、土壌診断の結果を基に必要に応じて、当該地域の地力増進対策指針に即した対策を実施することが適切である。

(参考資料)

各技術の内容等

1 有機質資材施用技術

技 術	技術の概要
①堆肥等有機質資材施用技術	土壌診断を行い、その結果に基づき、C/Nが概ね 10～150 の範囲にある堆肥等有機質資材を施用する技術
②緑肥作物利用技術	土壌診断を行い、その結果に基づき、緑肥作物を栽培して、農地にすき込む技術

2 化学肥料低減技術

技 術	技術の概要
①局所施用技術	肥料を作物の根の周辺に局所的に施用する技術
②肥効調節型肥料利用技術	普通肥料のうち、いわゆる被覆肥料、化学合成緩効性肥料及び硝酸化成抑制剤入り肥料を施用する技術
③有機質肥料施用技術	有機質（動植物質のものに限る。）を原料として使用する肥料を施用する技術
④その他技術	可変施肥田植機の導入、ドローンによる施肥、ドリップ施肥、低成分施肥、灌注施肥、緑肥、堆肥の施用、流し込み施肥、その他化学肥料の使用量の低減効果を有すると認める地域特認技術等

3 化学農薬低減技術

技 術	技術の内容
①温湯種子消毒技術	種子を温湯に浸漬することにより、当該種子に付着・侵入している有害動植物を駆除する技術
②機械除草技術	有害植物を機械的方法により駆除する技術
③除草用動物利用技術	有害植物を駆除するための小動物の農地における放し飼いをを行う技術
④生物農薬利用技術	害虫の捕食、害虫への寄生等を行う天敵を利用し、当該害虫を防除する技術
⑤対抗植物利用技術	土壌中の有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する効果を有する植物を栽培する技術
⑥抵抗性品種栽培・台木利用技術	有害動植物に対して抵抗性を持つ品種に属する農作物を栽培し、又は当該農作物を台木として利用する技術
⑦天然物質由来農薬利用技術	有機農産物の日本農林規格（平成 17 年 10 月 27 日農林水産省告示第 1605 号）別表 2 に掲げる農薬（有効成分が化学的に合成されていないものに限る。）を利用する技術
⑧土壌還元消毒技術	土壌中の酸素の濃度を低下させることにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術
⑨熱利用土壌消毒技術	土壌に熱を加えてその温度が上昇することにより、土壌中の有害動植物を駆除する技術
⑩光利用技術	有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止するため、有害動植物を誘引し、若しくは忌避させ、又は孢子発芽などその生理的機能を抑制する効果を有する光を利用する技術
⑪被覆栽培技術	農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術

⑫フェロモン剤利用技術	害虫の雌が放出する種特有の性フェロモンを利用し、雄をトラップで捕殺したり、交信を攪乱する技術
⑬マルチ栽培技術	土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で被覆する技術
⑭その他技術	秋耕、畦畔の漏水防止、循環扇利用、ドローンによるピンポイント防除、輪作、その他化学農薬の使用量の低減効果を有すると認める技術、リスクの高い（ADI が低い）農薬からリスクのより低い農薬（ADI が高い）への転換等

（沿革）

- 1 策定 令和5年3月15日（4農産第2850号）
- 2 「愛媛県持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針」（以下「旧指針」という。）は、この指針の施行日をもって廃止する。